

平成21年度 第3回山形県教育懇話会 開催概要

日時：平成22年3月25日（木）13:35～15:45

場所：山形県建設会館 中会議室2

1 開会

2 教育長あいさつ

委員の皆様方におかれましては、年度末のお忙しい中、全員の御出席をいただき、心より感謝申し上げます。

さて、県では、加速的な人口減少、経済情勢の急速な悪化、そして医療・福祉や雇用など県民の暮らしを取り巻く不安の増大といった国内外の社会経済情勢の大きな変化に対応できる生活基盤を築き、県勢発展につなげていくため、昨年7月に、新たな総合計画の策定について諮問し、策定作業を進めておりましたが、19日に閉会いたしました県議会2月定例会において第3次総合発展計画の策定について県議会の議決をいただきましたので、年度内に策定する運びとなりました。計画の基本目標は「緑と心が豊かに奏であい、一人ひとりが輝く山形」と設定し、県民一人ひとりの思いと行動を起点として県づくりを進めることとしておりますが、教育・人づくりの重要性を計画全体に通じて打ち出しているところであります。

県教育委員会といたしましては、この新しい県づくりの方向性に沿って、一層、諸施策を推進してまいりたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

さて、本日の会議では、三つの協議事項を準備しております。一つ目は、今年度の教育委員会活動の自己点検・評価の現時点でのとりまとめ、2月末時点での事務・事業の進捗状況、二つ目は、来年度、平成22年度の当初予算の概要、そして三つ目は、県教育委員会の主要施策であります少人数学級編制等を推進する「教育山形『さんさん』プラン」についてであります。

いずれも、今後の施策展開にあたってのご意見、ご提言を頂戴いたしたいと考えております。委員それぞれのご専門の分野で、また幅広い視点から、積極的なご発言をいただきますようお願い申し上げます、簡単ですが、ごあいさついたします。

3 協 議

（1）平成21年度教育委員会活動の自己点検・評価（2月末現在）について

池田座長： それでは、よろしく申し上げます。限られた時間ですので重要な3つの議題ということとです。進行にご協力よろしくお願ひしたいと思います。それではさっそく協議に入りたいと思います。本日の協議題1ということで平成21年度教育委員会活動の自己点検評価（2月末現在）について、よろしくお願ひします。

事務局： （資料1-1～資料1-3により説明）

池田座長： それでは、委員の皆さんは事前に資料に目を通されていると思いますので、これからはフリーでご意見や質問をいただきたいと思ひます。

齋藤委員： 「やまがた教育コミュニケーション改革」についての明るい話題を提供したいと思ひ

ます。去る3月3日に県選挙管理委員会主催の「選挙啓発公開講座」が山形国際交流プラザで開催されました。その時、講師でいらっしゃる城西大学経営学部の新井教授が、「イギリスの学校における有権者教育」と題して、シチズンシップ、いわゆる市民性についての教育の事例を中心に話されましたが、講演のまとめの段階で『やまがた教育コミュニケーション改革』は学校・家庭・地域の連携を図り、たいへん対話を重視した活動をしているので、まさに市民性を育てることに通じているんだ」と、先進的な山形の取り組みに対して敬服するということでした。受講者は、各市町村の選挙管理委員などで269名参加し、大半は中高年者でした。皆さんの表情を見ても、さすが教育県山形というような満足感の表情が伺えていい印象であったことを申し上げます。

鈴木委員：平成21年度の教育委員会活動自己点検・評価について3点申し上げます。一つ目は細かいことですが、高島町立二井宿小学校における「児童生徒の体験機会の充実」という項目についてです。私自身、二井宿小の農業を主体とした体験学習に参加し、また校長先生からお話をいろいろ伺ったり、子どもたちの様子も見せてもらったりしましたが、たいへん素晴らしいと感じました。あのような学習ができる県内の学校はいっぱいあると思いますので、今後も大いに進めてください。

二つ目は、「食育」についてです。栄養教諭が各学校に配置され、食育教育が進んできたことは嬉しい限りです。私もこれまで西村山郡学校保健会などの機会で、栄養教諭から具体的な食育教育の内容を何度も聞いています。その内容自体は素晴らしいと思うのですが、気になることもありました。それは、食育教育のカリキュラムばかりにとらわれていて、食育教育を通じてどういう子どもを育てるのかという理念や目標が、何人かの栄養教諭と話してみて、よく分かってないというか、少なくとも共通しているものがないなという感じがしたのです。そういう意味では、今後、食育教育の充実には栄養教諭の研修なども必要なのではないのでしょうか。すなわち、食育教育を栄養教諭に任せっきりにするのではなく、山形県としての食育教育の理念・目標を共有し合えるような研修会が大切だと思います。

三つ目は全体に関わることですが、活動自己点検・評価の達成状況を見てみると、参加者の数だけしか示されていないものが大部分です。例えば、こういう催しに参加した人数とか、こういうことができた学校の数とかが示されているだけです。もちろんそういう数字も大切ですが、関係者や参加者に対して「研修会の講師の話は物足りなかった」とか「今回の事業はよかった」など、成果についてのアンケート調査も必ず実施されているはずですが、だとしたら、達成状況については参加者の数だけではなく、参加者からの感想・評価も示すべきではないのでしょうか。事業にどのくらいの参加があり、その内容は良かったのか、それとも問題があったのかということが分かれば、それらを次の取り組みにも活かしていけると思います。

國眼委員：2つ程お話しいたします。今の鈴木委員のお話に全く同感で、例えば5ページの「家庭教育支援体制の充実」ということで、事業所への出前講座が13ヶ所で開催されたとありますが、山形県は共働き家庭が多く両親がともに働いている場合が多いわけですので、このように事業所で開催されるというのは、たいへん効果的なひとつの方法だろうと思います。ただ残念なのは今のご指摘にあったようにこの取り組みが役に立ったのかどうかということが報告の文面から見えてこないということです。特に達成目標のところには何も書いてなくて横棒が引いてありますが、やはり働く保護者の方に家庭教育ということを考えていただく、一緒に考えて一緒に取り組んでいただく機会を提供するのはた

いへん意味があると思いますので、その辺をご検討いただきたいと思います。

それからもうひとつ、14ページの「キャリア教育」に関してはここ数年だいぶ取り組みが強化されてまいりました。ここにはインターンシップ、キャリア教育の推進と言うことでインターンシップを体験した生徒数と、協力いただいた事業所の数、それから社会人講師招聘事業で参加した生徒の数と講師の数というのが記入されており、それでおおむね達成されたということになっておりますが、キャリア教育というのは何もインターンシップに限ったことではありません。基本的には若者が社会的に自立していく、つまり自分が持てる力を他者に提供することによって経済的に自立しひとりで生活を営む力をもった人間になるよう育むことがキャリア教育の目的だろうと思いますので、キャリア教育の捉え方を今少し幅広く捉えていただきたいと思います。本県は現在コミュニケーション改革に取り組んでいますが、キャリア教育とコミュニケーション改革をうまく連動させていただきたいと思います。といいますのも、働いていない若者をサポートするジョブカフェのカウンセラーの調査では、働いてない若者の問題点は何かというと、まず第一に自信がないこと、それからコミュニケーション力不足、それから3番目に行動力不足、この3つが挙げられているわけです。ここでもコミュニケーションというのが出てまいりますので、行き詰ってしまって困ったという年齢段階になってから支えるのではなくてぜひ、小中高の段階から具体的に組み込んでいただきたいと思います。それから先ほど齋藤委員からコミュニケーション改革についてなかなかいい取り組みをしているというご指摘を受けたとのお話を頂戴しましたが、もう少し県内にコミュニケーション改革はどんな事を目指してやっているのかというのを、学校だけではなくて地域等でももう少し分かりやすいようにパンフレット等を配付させていただきたいと思います。私は大学で教職課程を担当しておりますけども、コミュニケーション改革を学生たちに具体的にどう伝えたらいいかちょっと不明確なところがございます。それから、キャリア教育についても一つ申し上げますと、保護者への働きかけというのをぜひ考えていただきたいと思います。今の若者たいへんに親思いでして親御さんがどう考えているか、親を悲しませたくない、親を喜ばせたいと考えており、親御さんの持つ職業観・勤労観に非常に大きな影響を受けております。従って、先般、新聞でも報道されましたが、リクルートと全国高等学校PTA連合会が連携して行った調査では、保護者が高校生に向けて一番多く語っている言葉は、「やりたいことをやりなさい。好きな事をやればいいのよ。」という言葉なのだそうです。しかし実はこれほど高校生を迷わせる言葉はありません。この調査では保護者は高校生に助言できなくて困っているという意見もあったようですので、キャリア教育というときには、学校と生徒、そして地域の社会人の方だけではなくて、そこにぜひ保護者の方も巻き込んだキャリア教育を考えていただきたいと思います。それから、単に話を聞くだけではなくて、聞いた後に交流活動などに結びつけていただけたらありがたいと思っております。

柴田委員：一つは皆さんと同じなのですが、事業を実施して、それを受けた子どもたちがどういう風に変化したかを何で捉えるかだと思うんですよ。いじめの数が減った、不登校の数が減った、あるいはPISA（国際学習到達度調査）のレベルが上がったとか、そういうもので捉えていけばいいのではないかと思います。というのは、産業界もそうなんです、20年何も変わってないんです。20年前の本読んでも10年前の本読んでも、言うことは今と同じことを言っていて変わってないということが、産業界では起きているんです。それと同じことが学校教育で起きていて、基本的にはいろんな手を打つただけで、それが本当に身になっているのだろうかと感じます。それが一番表されているこ

とは27ページにある「教育のゆとり創造」ですが、先生はなぜ忙しいのかという分析をしておかないと、また先生がこういう「教師のゆとり創造プログラム」の関係で呼び出されてまた忙しくなる。本質的な教育とは何かという話がベースになるべきであり、余計なものは取り払ってあげなくてはならないし、家庭がやるべきことは家庭がやるということを確認していかないと。いつも話させてもらいますけど、国際競争力という意味から子どもたちの教育がうまくいかないといけない。

あと非常に重要なポイントは、企業も大学も、トップが何を考えてどう実行するかということだと思えます。良い校長先生がいる学校はすごく良くて、子どもたちも良くなる。やはり指導者の人材育成を大きなポイントの中に入れておくべきじゃないか。結構いろいろな問題が、その校長先生が来てやってみると結構良くなっていて周りも引きずられて良くなっていて、親も結構その先生についていく意味で、やはり校長先生、教頭先生の人材育成がすごく重要です。

それからもう一つ、高校のことなのですが、ヨーロッパを見てもそうなのですが、工業高校、農業高校、水産高校や、一次産業がものすごく重要なのであり、職業訓練高校をきちっとすることが基本的には山形県の産業を救うこととなる。大学ではなくてむしろ職業訓練高校が重要なのです。長井工業高校にしても米沢工業高校にしても新庄神室産業高校にしても結構いい取組みを始めている。東根工業にしても太陽電池パネルを作って海外に持っていったとか、米沢工業高校の電気自動車を開発した例もそうなんですけど、実はあの例は産業界と結び付けたのです。産業界がバックアップするような形にするんです。先々週、いろんな学校を見てきたんです、大学も含めどういうことが行われているか。そうすると産業界の人たちが結構入り込んで、いろいろバックアップしているんです。やはり、学校の先生だけでは基本的に手に負えない部分があるんです。なぜならば社会に出て行く子どもたちをどうやって作っていくっていう話ですから、社会での接点を学校がもうちょっと積極的にもっていかないとうまくできません。ドイツで見てきた大学も高校も小学校から高校までの一貫の教育を見てきたので、後で写真をお見せしてもいいんですけど非常に面白かったです。やっぱりそういう意味では子どもたちをどういう風に引っ張っていくかというところの評価ポイントが絶対必要だなと思います。

板垣委員： ちょっと違う観点からなのですが私の方がおそらく教育行政にだいぶ慣れてきたというか少し親しみを持ってきたせいなのか分かりませんが、今回の資料を全体に拝見して、教育行政に躍動感が出てきたなという感触があったんです。全体が解決志向的に、未来志向的に感じ取られて明るい気持ちになったということをお報告しておきたいと思います。この感じでいって5年後、10年後どう変わって行くのかなという気持ちになりました。先生方や教育行政は、しっかりと問題については捉えているんじゃないかなと思うんです。よく捉えていてどうしていいかが分からないということだと思います。そういうところの明るい片鱗が見えたと思うところがいくつかあって、例えば、訪問による家庭教育とか、訪問型にかなり積極的になっていてその入り方も上手くなってきている気がするんですね。次は訪問、家に来られるのが嫌だという人のためにサロン型なんてどうだろうとかいろんなことを考えてみたり、いろいろな事情をしっかりと聞き取った上でどう対策を取るかというところは、どこから答えが出るかというところやっぱりコミュニケーションです。コミュニケーションがあった上で同じ目線で共感して捉えてそれで一緒に考えてくれる人というのを望んでいる気がするんです。どこにいてもそうなんだと思います。家庭に行ってもそうだし学校の中でもそうだしそんなところが

あります。「教師ゆとり創造アクションプログラム」とか「実行ある1（ワン）プラン」にしても事例集が出るということですのでごく楽しみにしています。うまくいった事例集が見えたらまた希望が持てるなと思います。つまり、うまくいった事の中にこそすごく大きなヒントがある様な気がするし、周りを明るくして本当にいいものができそうな気がします。そういう未来志向的な希望が持てるものはエンパードする意味でもとても重要だと思います。

それから第2回懇話会で、先生方の復職、長期休業に関してお話ししたのですが、それも長期休業して復職した先生から聞き取りをして、何が功を奏してうまく行ったとか、どういう対応が足りなかったんだろうかというようなことを当事者に聞くことがすごく重要だと思います。心理相談を受けている立場からすると、そういうことの回答をぜひ聞いてみたいと思います。

それから中高校生で長期間不登校していた子どもたちが高校生になってライフスキルについての相談の場を設けようと、私も関わったことがあるのですが、その時に、つまずきはほんのちょっとしたことなのですが、コミュニケーション能力があまり上手じゃない・スキルがない・体験がないということで、分からなくても聞けない。ほんの小さなことが聞けなくてすごく積もり積もっているという感じが多い。聞けないし失敗に対応できないし開き直れない、思考方法が分からない。これは中高校生、高校生くらいになると余計にプライドも高くなってきているので自意識が過剰になっている部分もあるんですが、いまさら聞けないようなことに共感的に誠実に耳を傾けて同じ目線でともに考えてくれる人、そういう人が必要なんだなとすごく思いました。カウンセリング、心の病に沿う人ではなくて、もう少し違う視点での業務、あるいは気軽に明るく対応してくれ、それでいてすごく頼りになる人が必要だと思います。

池田座長： 平成21年度の事務・事業の現時点での点検評価については、次の議題でも関連付けてお話いただけると思いますし、また平成22年度になっても改めてお話を聞く機会があると思いますので、これで終了させていただきます。

（2）平成22年度教育関連主要施策について

池田座長： それでは次の議題です。事務局の説明はできるだけ省略していただいて、せっかくの委員の方のご意見の時間を多く取りたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

事務局： （資料2により説明）

池田座長： はい、ありがとうございました。では、ご意見いただきたいと思ひます。

無着委員： コミュニケーション改革につきましては、昨年、フォーラムや4地域におけるPTAの役員などによる座談会という形で、県や各地域の先生方からお話をお聞きしたり丁寧なご説明があったりで、たいへん学ぶところの多いものだったとありがたいと思ひております。本当は私たちも、保護者の皆さんへお伝えしていくという役割を担っているとは思ひものの、なかなか行き届かないこともありますので、ぜひ今後も、小規模な単位での学習の場という形で、教育委員会ではコミュニケーション改革に対してどう思

いで、どういうことを大事にして、学校現場や家庭で継続したものにしていくのかということも含めて、お教えいただける場を、またもっていただくとたいへんありがたいと思います。

それから、「子育て支援の充実」というところでもございましたように、改めて家庭教育はとても大事だと思っております。資料2には「親への学習機会の提供と支援体制の充実」ということがあげられていますけれども、やはり教育というか、就学前の小学校前までに心の土台といいますか、そういったものを家庭の中でどれだけ作ってあげられるかもとても大切なことで、幼児教育、幼小連携であったり、小学校と中学校の係わりであったり、そうした大事にしなければならぬ本当の元になるものを家庭で、親が、あるいは家族が、一生懸命に関わってやっていくべき事であるということも、ぜひコミュニケーション改革の一つとして、学校に入ったから急に始めるということではなく、より小さいうちから、お腹にいるときからと言っていいくらい大切なことだと思います。その辺りをぜひもっとアピールし、教えてくれる場があればたいへんありがたいと思います。そしてコミュニケーション改革に関しては、私たちPTA連合会も共感する部分多くありまして、21年9月に保護者に対して教育に関する意識調査を県内約1,800名の保護者に対して行いまして、その中には学校に対する願いや思いなども出ていたようですが、やはり学校から家庭に情報を多く提供していただきたいという要望がたくさん出ていたようです。子どもに関する不都合な情報ももしかしたらあるかも知れませんが、親にとっては不都合でも子どもをより良く育てようと思えば、それも親は受け止めなければならないと思いますので、そういった事も含めて子どもに関するいろいろな情報を先生方も家庭もみんなで共有して十分なコミュニケーションがとれているということが大事なのだろうということが、今回のアンケート調査からも出ているようです。そういう思いを、ぜひ現場の先生方にもお伝えいただきまして、より良い育ち、あるいはお互いのかかわりができるような教育にさせていただければありがたいと思います。

それから、先程来、先生方の多忙化について話が出ていますが、このアンケート調査から、約7割の保護者は先生方が忙しいということを理解しているようです。そして、先生方の信頼ということに関しても、約7割の方は高い信頼を寄せているという結果も出ています。こういった事もとても大事なそれこそ「コミュニケーション」ではないかと思っておりますので、ぜひ今後もこういった心の通い合う一人ひとり丁寧な関わりを持っていただけるような場をお願いしたいと思っております。

内ヶ崎委員： まず、1番目の議題の自己点検・評価については、こういうご時世の中、よくやっていると思えました。2番目の議題の22年度予算については、新しく予算化になった事業の中で見ますと、「ネット被害防止スクールガード事業」が新しく計上されて非常に良い取り組みであると思ったところです。ボランティアやNPO法人などで個人的にいろいろそういった事をやっているという話を聞いたことがあったので、これを県ですていただけるのは非常にありがたいと思えました。

あと、「スクールカウンセラー」の異動についてですが、たまたま個人の理由で異動となるのでしょうか。スクールカウンセラーの先生と医者と生徒たちの関係での転勤は時々あります。それからスクールカウンセラーの先生は心理職の方だということは分かるんですが、「青少年指導専門員」の方と「子どもふれあいサポーター」の方がどういった人たちなのかちょっと分からないので、教えていただきたいと思います。ちなみにスクールカウンセラーを置いていただいていることは非常に良いことで、他の県から見ると羨ましいと言われることが多くてありがたいと思います。

事務局（義務教育課長）： 「スクールカウンセラー」の配置につきましては、カウンセラー協会と義務教育課が話をしまして、それぞれ抱えていらっしゃる地域、あるいはお仕事がございますので、そのところがうまくいくように配置を毎年度検討しているというところがございます。それから、「青少年指導専門員」は、4つの教育事務所に警察OB又は現役の警察の方においでいただきまして、その方がそれぞれの地域の生徒指導上の問題、非行の防止が一番の主眼であります。問題行動への対処の仕方、あるいは警察と学校を取り持つ役目をしていただいています。様々な相談にのっていただいています。それから「子どもふれあいサポーター」といいますのは、一定の資格を有する方というよりは、地域の子どもたちについて、特に不登校の改善と未然防止が目的なんです。それに関していろいろ力を貸していただいている方々であります。スクールカウンセラーの資格は特になく、学校に来ていただいて相談に乗っていただいたり、時には勉強を教えて頂いたりというような役割をしていただいています。

高山委員： 私は今、新庄市の教育のサポーターと幼児共育に少しばかり関わっています。平成21年度と22年度の「いのちの教育サポーター」のところを見ますと、すごく進捗状況がよく見えて、このまま行くといい感じだと思いました。そこで質問なのですが、いのちの教育サポーターの数が新規100名になりまして、先ほどの説明ですと累計200名となっており、確かこの事業は3年間実施すると思いますが、3年間で県全体で200名の「いのちのサポーター」が登録になっていることとなりますが、その辺がちょっとクエスチョンだなあと感じます。なぜかといいますと私どもで最上地域の読み聞かせボランティア協議委員会がございまして、10年ほど前はサークル・団体が10ほどしかなかったのですが、私ども、「いのちの教育サポーター」などのいろんな事業のお陰で現在35ほどの団体になっています。その最上地域の団体・サークルの方々が、つまり地域の方々が、ほとんど全ての小学校・中学校に伺って読み聞かせのボランティアなどを行っている現状です。いろいろなサークルにまたがっている方もいますが、私どもの団体の調べで人数を把握しますと、最上地域だけで700から900名ほどの地域の方々が活躍しているという調査結果がありましたので、「いのちの教育サポーター」の位置づけというか、ハードル・条件というんでしょうか、その辺どうなっているのかご質問いたします。

事務局（教育企画室長）： 「いのちの教育サポーター」についてお答えします。高山委員がおっしゃるとおり、この事業については平成19年度から始まりまして19、20、21と3ヶ年の事業であり、現在累計で217名の方が登録いただいております。いわゆるボランティア活動なさっている方は、これ以外にもたくさんいらっしゃるかと思います。ただこの数字の把握にあたっては、各教育事務所で毎年スキルアップ研修を開催しますが、そこに参加していただいて、更に斡旋・紹介により具体的に学校とか図書館等で実践をしていただいた数であり、新規のサポーター数と捉えておりますので、この事業の前に、いわゆるNPOとか読み聞かせの団体で既に自発的に活動なさっている方と活動形態は同じということもあるかと思いますが、事業の性格上そういうふうに、ある面限定的に数字を把握しているということがございます。

高山委員： 平成22年度の予算で、「いのちの教育の推進」の2の新規事業にも関係してくるかと思うんです。連携推進資料を作成し各学校に配付するというので、たぶん平成21年度にはデータベース化なさっている状況であろうと理解しております。ということで、地域で動いているサポーターをはじめ、そのサポーターをもっと支えるいわゆる現場とい

うのでしょうか、そういう「現場力」の視点、つまり、子どもたちを引っ張っていったり、子どもたちとともに、という場合の部分の「現場の視点」というのが母体になって広がっていくものと強く思いますので、そういう視点などもよろしくお願ひしたいところです。

【参考】高山委員からの後日追加意見

- ・ 幼児共育には、福祉分野もかかわる。一般の人から見れば教育も福祉も同じ。子育て支援には、教育と福祉の連携・協力が必要である。
- ・ 子育て支援のイベントは土日に集中して行われているが、子育て家庭にとって、土日はイベントに出掛けやすい一方で、土日にしかできない家庭の用事もある。土日にイベントをドンと打ち上げるのも大事だが、一方で、日常生活のペースの中で行うことのできる事が大事。また、その地域にあったやり方、今まで現場で活動している方々が継続してやってきたやり方、そういう、いわば「現場力」といったものが大事。親に余裕のある笑顔が生まれるのも、地域活動のリーダーが生まれるのも、日常生活のリズムの中からである。

柴田委員： 資料2の5ページの「時代が求める人材の育成」のところ、9番、10番、11番の事業に関しては結構よくできていると思います。一番大きい問題なのは、普通高校の生徒に対する「キャリア教育」です。今のままだと普通高校は基本的にはあまり社会のことを勉強する機会がなく、どんどん遅れてしまいます。キャリア教育というのは、今職業にどんな種類があって、どういうふうに細分化されていてそれで世の中が動いているのだということを教えてやらないといけないのではないかとということなんです。大学になってから、さあどんな職業に就こうかと考えるわけですから。中学校の頃からきちっとキャリア教育をしておかないといけない。その子どもたちが、将来非常に大きな力となるわけです。どうやって自分が生きていくかということに繋がるので、どういう職業があるのかというのが非常に重要だと思うんです。その辺を少し考えていただきたい。

それから、8ページにあります「山形大学教職大学院への派遣事業」というのは何を狙っているのかということ。要するに、経営学と経営が全く違うのと同じように、教師と教師力というのは全く違うはずなんです。だからそういう意味では、「人間力」とか、しぶとい先生を作っていくためには、やはり民間だとかボランティアの経験を2年くらいさせたほうが、大学に行くよりはるかに重要だと思います。経営の勉強をしても経営者になれないのと同じなんです。大学に行って一生懸命勉強しても、いい教師になれることは全く別なので、どういう目的でやっておられるかももう一回考えていただきたいということ。山形大学の中でも話題にあがりますが、「人間力」をどのようにして先生に持たせるかという教育が、ものすごく重要です。以上2点をお話させていただきます。

(3) 教育山形「さんさん」プランについて

池田座長： 要望のご意見ということでよろしいですかでしょうか。まだご意見あるかと思いますが、次のところでまたご意見いただけるとお思いますので、3つ目の議題に移らせていただきます。よろしくお願ひします。

事務局 : (資料3により説明)

池田座長 : 山形県が先んじて取り組んできた「さんさん」プラン、少人数学級というのが国をも動かしたと言っても過言ではないという状況です。この「さんさん」プランについて成果は目に見えるようですが、協議する時間が限られてきましたので、今後に向けたご意見等も含めて、何か激励を込めたご意見がいただければ幸いかなと思います。

高山委員 : まさに行動する教育「さんさん」プランということで、国をも動かしているんだなあと感じました。これからも、私自身も自分の立場でそういう「さんさん」プランに参加していきたいと思います。大人もそうですけれども、子どもたちは、結局は未来に向けてということで、豊かな生涯学習者を育てていくんだなと改めて感じ入っているところです。「さんさん」プランという少人数学級がより効果的になるために、これからも模索していくというお話でしたので、ぜひ入れてほしいし、どうして入っていないのかなと、素朴な疑問に思ったものですから提案させていただきますが、前回の懇話会でもお話ししましたが、今説明あったのは、先生方とか、人的な対応とか、専門的な部分の対応であろうと思います。学校には必ず学校図書館がございまして、対話重視学習とか共同型学習には学校図書館活用教育というのは絶対に少人数学級をサポートするものだと確信しているところです。ぜひ「学校図書館活用教育」を追加して、またまた国を啞然とさせていけたらいいんじゃないかなと思います。そういう下地はもうできているはずで、県にはよろしくお願ひしたいと思います。

齋藤委員 : 提案になりますが、学校は校長を中心にして「さんさん」プランを積極的に活かす工夫をしてほしい。山形県の広報誌「県民のあゆみ」の3月号で「さんさん」プランを特集で組んで県民に周知されています。まさに新年度を迎えるこの時期に保護者に通知したということは、保護者は希望と安心感を持たれたんじゃないかなと思います。「さんさん」プランの中で保護者の最大の関心事は何だろうと考えてみますと、それはやっぱりわが学校・わが子の学力水準はどうなったのだろうかということだと思います。保護者は授業参観を通して、学習意欲とか集中力とかそういった学習態度は目に見えて捉えられます。しかし学力の実態については見えないし、なかなか分かりにくいと思います。保護者は案内とかPR資料を見ることで、全国に先駆けて実施した「さんさん」プランを大事にしたいな、次に活かしてほしいなという熱望を抱くのだと思います。例えば「さんさん」プランを実施したためにどれだけ学力が高まったのかとか、全国平均と比べてどうなのか、何がよくて何が悪いのか、あるいは課題・問題といった弱点を解決するためにはどうすればいいのかなど、そういったことに関心が高いのだと思います。そういうことへの対応としては、校長を中心にして「さんさん」プランを子ども一人一人に積極的に活かすための工夫をするのが大事なのだと思います。例えば、「指導法の改善」、「板書の方法」、「子ども理解」などといったことがあると思います。こういうことを積極的に実践して、そして子どもたちの学力向上はこうなったよとか、こんなことで成長したと保護者に随時知らせる。先ほど保護者から学校からの情報をどんどん送ってくれというお話がありましたが、そのためにも保護者が今求めている問題だと思います。そういう意味で、学校と保護者がそういった情報を交換することによって両者の信頼関係はますます絆が強くなっていった教育効果が高まっていくのではないかなと思います。教育行政の皆さんの熱意が学校現場に届くように、これからの手立てが大事であると思います。

内ヶ崎委員： とても非常にいいプランだと思います。それからあとTT（チームティーチング）を行うというのもとても良いと思うんですが、できればTTは一定の人数により区切るのではなく、たいへんな子どもさんがいるところに行けるようなフリーランスのような教員が配置されると非常にありがたいと思います。8人くらいの少人数の中でも発達障害の子どもさん、多動の子どもさん・自閉症の子どもさんがいるだけで、先生がたいへんな状況になっています。そういった場合に担外の先生方が応援に駆けつけてくれるのですが、やっぱり常時いられるわけではありません。それからTTで思い出すのはチーム医療のことで、医療の場合、医師、看護師、心理、その他いろいろケースワーカーであったりします。整形外科でいうと夜勤の先生も。そういった方が総合的に情報交換しながら、あとは事務職のことも情報交換しながら患者さんに対応していくことで治療効果を上げられると私は思っているのですが、これを学校に置き換えてみると、担任の先生の学級王国ということではなくて、いろいろな職種、校長先生をはじめ管理職、養護の先生など、いろいろな人が情報を一元化して、その情報を家庭に返し、情報共有し、連携していったらいいければ、これはより良いものになっていけると思っています。

無着委員： この少人数学級あるいは副担任制については、保護者もたいへん期待をし、評価をしていますので、生活と学習が一体となった教育ということでの大切さが、保護者に伝わるようお願いをしたいと思います。こちらの少人数学級であることの良さの中の「所属感、子ども同士の関係性の深まり」のところにある「互いの関心・愛着・信頼関係が深まって学級のまとまりができる」ということは、将来社会に必ずや繋がっていく土台が出るんだと思います。今、内ヶ崎委員がおっしゃったように発達障害のお子さんへの配慮あるいは対応ということでだいぶ苦慮なさる部分があるのが現状であると聞き及んではおりますけども、特別支援を必要とするお子さんが必ず学校・地域にいらっしゃるのが現実だと思います。そういったお子さんも含めて、こういう関係性の深まりというか思いやりを持ったかわりということが大切になってくると思いますので、ぜひその辺りも含みをいただいた「さんさん」プランになるようにお願いながら、そして私たち保護者もきちんと向き合うべきところに向き合っていければと思っています。

國眼委員： この「さんさん」プランは、無着委員がおっしゃいましたように、多様なお子さんたちに柔軟に対応できるプランとしていよいよ本格的に始まるのだと非常に期待を持っています。特に、不登校、別室登校の方たちに対する学習指導は非常に意味があると思います。実は酒田市内で不登校の保護者の方を対象にした会をやっておりますけども、だいたい中学校2、3年生になってきますと保護者の方から出てくるのが、この子が将来、社会人としてどうなっていくのだろうかという不安がたいへんに強いわけです。不登校という問題から二次的に発生した問題を食い止めるという意味で、「さんさん」プランには非常に期待が大きいところです。別室登校生徒への学習支援は中学校において行われるわけですが、実は中学校1年生の不登校のお子さんのかかなり多くの場合が小学校から不登校を継続しているケースも多い状況です。小学校の不登校の方はまだまだ少ない状況ですが、やはり小学校5、6年生で不登校になり始めたお子さんへの対応というのも今後考えていただければありがたいと思います。

板垣委員： まず、授業改善については、充分ではないとお話ですが、取組みの方向性はかなりいい線いってるなという感じがしました。ますます5年後、10年後が楽しみになってき

ました。この雰囲気先生方が、工夫して、試行錯誤して、ものすごく楽しいワクワクするものに捉えていってどんどん進めていっていただければいいなと思います。5年後、10年後が楽しみだと言いましたが、その一方、過去に不登校をして現在高校生になっている方は、高校の中で基本がやっぱり分からない、そうなると、やはり社会に繋がっていかないというのがあるんです。それは緊急に対策が必要だと思います。その部分を高校の先生はフォローできないのかと聞きましたところ、やはり高校の先生は高校の先生のカリキュラムで教え方も自分たち確立しているので、基本の教え方のコツがわからず難しいとおっしゃっています。ですので、もしよろしかったら、小中学校で退職なさった先生でもよいのですけれども、高校の不登校経験者に対して基本を教えてくださいのような対応があったらと思いました。

柴田委員： みんながいいことを言うので、僕は少し否定的なことを言います。「さんさん」プランというのは非常にいい。けども先ほど言ったように、日本で一生懸命勉強して学力が上がってどうなるのかということです。どういうことかということ、世界の標準は、日本とは全く違うPISAという観点で考えさせるんです。グラフを見ておかしくありませんかとか、5プラス5は、何プラス何ですかという教育の内容が全然違うんです。だから日本の産業が負け続けて日本が孤立して世界で話ができない。要するに、コミュニケーションの問題もそうなのですが、教育のあり方というのは本当は全く違う。この「さんさん」プランは非常にいい。しかし、では世界で本当に自立して生きていける、社会で生きていける人間をどうやって作っていくのかということ、少し今度は山形県の「さんさんプラン・プラスアルファ」として日本の先に行くようなことをやっていただきたい。授業もそうですが、一方的に教えてもダメで、かなり話をさせるということがものすごく重要だと思うんです。だから、コミュニケーションは1つの学問ではなくて、小学校からずっと先生と親との間のやり取りですから、山形大学でもやっているんです、コミュニケーション学という授業をやっているのですが、全然ものになりません。だから、常に先生と疑問を感じたことをぶつけ合って、先生も答えてあげるだとか、そういう教育でないといけない。「さんさん」プランは山形県の大成功で、これに新しいプラスアルファをぜひ加えて、山形ってすごいなあって思われる、そして山形から出た子どもたちが雄雄しく日本を引っ張っていける、あるいは山形県を引っ張っていける。今のままだったらまだ陰の部分を生懸命やっているだけの様な気がします。ぜひお願いします。この「さんさん」プランはめちゃくちゃいい仕組みだと思いますので、その上に新しいものをぜひ築き上げてください。

板垣委員： この授業改革こそが考える力を養うための改革だと思います。なので今あったことを授業改革の中にぜひ含んでいただければいいなと思います。どういう資質が必要かというファシリテートする能力が先生方に非常に必要なんじゃないかと思うのでその辺強調したいと思います。

高山委員： どうして重点授業の中に国語がないのでしょうか。国語は当たり前のことだからなのでしょう。

事務局（義務教育課長）： 本県の子どもたちの国語の学力は、全国的にもすばらしく高いです。これは本県の国語教育の伝統がそうさせていると分析しておりますが、読書活動が盛んで、先ほどありましたように図書館を活用した学習活動であるとか読書指導が功を奏して

いると考えています。逆に非常に弱いのが理数系です。重点教科としては理数、それから英語も非常に弱いものですから、これを重視した対策ということでの重点教科です。国語を大事にしない訳ではありません。

(4) その他

鈴木委員： 実は私には、山形県内はもとより、全国的にも小中学校の教頭、校長に少なからずファンがいます。そういうところで子どもたちの授業、講演、ワークショップなどをしていて思うことは、「山形の小中学生は、『すっぴたれ』が多いなあ」です。すなわち、引っ込み思案、周りの目を気にする、失敗を恐れる、自分の気持ちを語れない、気持が込もった感情表現が下手……。もちろん、そういう子どもはよその県にも結構いますが、山形県はとにかく多い。そういう意味では、この度の県教育委員会提唱の「コミュニケーション改革」は的をえているように思います。もう一つ、これは山形県の小中学生に限らず、山形の若者全般に言えることですが、幼いと言うのか、頼りないと言うのか、気持ちや考え方、価値観が幼稚だということです。彼らと話したり付き合ったりして、あるいは彼ら同士が話しているのを聞いていて、しみじみそう思います。良く言えば、「めんごい」ということですが……。私が属する寒河江ロータリークラブでは、1年間に及ぶ高校生の長期交換留学事業をこれまで30年以上続けてきました。そして、米国や英国から来た高校生が例外なく帰り際に言っていくセリフが、「日本の高校生は幼いね、自立心がないよ」です。実は私、この度、同じく寒河江ロータリークラブの国際奉仕事業で日本の小中学生および高校・大学生8名を連れて台湾への1週間の短期交換留学事業に同伴し、昨日帰ってきたばかりなんです。台湾のホームステイ、小中学校、大学、企業、行政施設その他との交流をしてきて思ったことにしても、やはり「山形の若者は『すっぴたれ』でコミュニケーションが下手、気持ちや考え方・価値観が幼い」ということです。実際、この台湾との短期交換留学も既に10年近く続けていますが、その度に「山形の、いや日本の若者は果たして大丈夫なの」と心配に思います。若者の離職率七五三現象の原因にしても、こうした若者の特徴と無関係ではないような気がします。そういう意味では、山形県の「コミュニケーション改革」に掲げられた『高校卒業時の若者像』というのは、どう考えても立派過ぎます。いくら目標とは言え、あまりにも現実と乖離してはいないでしょうか。むしろ、今の彼らに大切なのは自信、志、誇り、希望、価値観、心の強さ・美しさといったものだと思います。昨晚のNHK「山の小学校ラストコンサート」という番組をご覧になった方もいるでしょうが、見ていてその感を益々強くしました。山形県に限らず、今の日本の子どもたちは普段から場数を踏んでいない。だからこそ彼らに最も必要なことは、様々な実体験と実感。そして周りの大人からの共感、価値づけ、勇気づけを通して、自信や志、誇りや希望を育み、正しい価値観や心の強さ・美しさを身につけさせていくことだと思います。そういう意味では、4教振の「感性教育」も5教振の「いのちの教育」も方向性としては実に正しいと思いますが、最近の中高生や大学生を見る限り、十分な成果が上がっているとは思えません。その最たる理由は、そのための教育手法を授業にばかり求め過ぎているからではないかと思います。要するに、教師の得意分野、専門分野である授業を通して達成しようとするだけでなく、授業以外の学校生活にも様々な手法を求めるとともに、家庭生活、さらには社会教育の分野にも、手法や連携・協力をもっともっと求めるべきではないかと思います。実際、寒河江ロータリークラブが台湾との短期交換留学を続けてきたのも、1週間後に帰国する頃には、

子どもたちの誰もが一回りも二回りも見違えるくらい大きな人間に成長しているからです。『すっぴたれ』でコミュニケーションが下手、気持ちや考え方・価値観が幼い彼らだって、適切な機会や体験があれば、自らを磨き立派に成長できるのです。まさに、実効性のある感性教育、いのちの教育、コミュニケーション教育になっているから、この短期交換留学を続けてきたのです。

さて、第2回懇話会では、学校と地域社会との連携・共同の大切さが強調されました。しかし、そういう場合の連携・共同というと、教育行政の皆さんはNPO法人とか地域のボランティア、公民館、町内会などを頭に思い浮かぶのではないのでしょうか。それらはそれで有効だとは思いますが、私としては第1回の会議でも述べたように、地域や企業の横断的な組織とも、具体的にはロータリークラブやライオンズクラブ、青年会議所等の組織とも積極的に連携・共同をすべきだと思います。それらの組織は、学校、行政、企業だけでなく、PTAや町内の組織、さらには県内外とも人間関係を広くかつ深く持っているメンバーが多いだけに、NPO法人や地域ボランティアよりも強力でかつ機動的に動いてくれるはずです。実は本日、DVDを持ってきました。私自身、寒河江ロータリークラブの会長として1年間やってきたことを、特に青少年教育に関してやってきたことを40分ほどにまとめたDVDです。それを見ていただければ分かると思いますが、たかが片田舎の寒河江ロータリークラブでさえ、行政、教育委員会、地域、学校、保護者、企業、マスコミ等を巻き込んで、このくらいの青少年育成事業ができるわけです。そういう意味では、各市町村の社会教育課は確かにそれなりのネットワークも持っているでしょうし、それらの維持・活用も出来ているとは思いますが、もっともっとウイングを広げる必要があるのではないのでしょうか。また、縦組織だからなのか縄張りがあるからなのか、社会教育課は意外に学校との連携が上手くできてないように思えるのですが、私の見込み違いでしょうか。いずれにしても、望むと望まないにかかわらず学校は地域コミュニティーの核のわけですから、そういう確固たる自負を持って、家庭・地域・企業と連携、共同しつつ、「感性教育」や「いのちの教育」、「コミュニケーション改革」を推進してほしいと思います。

最後に、先ほど述べた台湾との短期交換留学事業ですが、台湾で見てきた小中学校は、どこの校長も「学校は、お国のために児童生徒の学力を向上させます。強く美しい心を育てます。そして地域の核を果たします」と明言します。日本の校長にも、そういう強い意志とリーダーシップを期待したいです。うち1人は女性校長でしたが、県教育功労賞を受賞した元山形八中の金澤和子先生の3人分くらいのバイタリティー溢れる先生でした。日本も負けずに頑張りましょう。

柴田委員： 昨年山形大学で大学生と県内企業を回った様子を記録したDVDを作りました。全く話のできなかつた大学生が、最後には途方もなく話ができる姿が記録されており、全国の高校・大学・企業にそのビデオを経済産業省が配付するそうです。私のところに1箱あるのでぜひ見てください。山形大学の工学部では2年生の授業に取り入れることにしました。こんなにすばらしい子どもたちが訓練しだいでコミュニケーション能力が高くなる。

池田座長： はい、ありがとうございます。最後にこれからの山形の景気ということでお話ありました。私は座長ということで今日は一切お話しをしないで終わるつもりでいましたけども一つだけ、1、2分時間いただきます。実は私、先月ベトナムとカンボジアに行ってきました。なぜインドシナなのか。何かそこに行って山形の教育で勉強になることが

あるのかということもあるんですけども。私はベトナム反対の時代に青春を送った人間です。カンボジアは非常に教師として関心がありました。きっかけは息子です。息子が世界旅行している中でアジア・ヨーロッパを周っていて、最後にたどり着いた彼の結論は、自分はアジア人だということでした。私がいつもヨーロッパを中心に旅行に行くので、私に、帰ってきて1年位してから「お父さん、教師としてアジアに行かないでどうするんだ」と言われました。目から鱗でした。息子がそのようなことを言うということは、やっぱり行ってみないとと思って先月行ってきました。私が見て感じたところはごく一部であり、今日のお話とか山形の教育に何かつながる話ができるかと考えましたが、簡単に言うとかいうことです。やはりあれだけの世界遺産、世界に誇るあれだけの事をやった民族の現在の姿です。確かにここ数年は観光化されて、よそからたくさん入ってくるといいながらも逆にそれが貧富の差を広げています。私が行って一番びっくりしたのが町から5分、10分車で離れると、まだ電気も水道もなく、そして5年後、10年後には命がなくなるであろう水を今生きるために飲んでいるというのが現状です。そして、私は芸工大で「子ども芸術大学」を担当しているのですが、うちの山形の子どもたちと比べて何が違うのかなと思ったんです。それは目の輝きです。どう思いますか。死んでると思いますか。逆で、キラキラしています。「子ども芸術大学」の子どもたちも、他の子どもたちより目がキラキラしているんですが、しかしそれよりもキラキラしていました。ところが何年か経って小学校そして高学年くらいになると学校を辞めさせられるんです、親の都合で。そして労働者・労働力として働く。観光客やよそから来た人間に物乞いしたり、親の労働力の一端を担って。ところが本当にこんな子どもたちは目をキラキラして私たちに乞う。まさに教育の原点はここにあるなと思ったのは、先生がいないのです。ポルポトの事件により、知識人、先生、医者がない。そして今の日本もヨーロッパ・フランスを中心にイギリスとかいろんな国が援助をしますけども、やっぱり建物を建てたり直したりということだけ。地元の現地の関わった人たちのお話しは「先生がほしい」。それが子どもだけではなくて親にも教える先生がほしい。親は子どもを学校に入れますが、教育に対する意義を見つけていない。つまり勉強するということは、いずれ殺される、知識を持つと権力者から殺されるんだとトラウマがあるので学校に入れても、1、2年で修業終わりです。

日本の教育を考えたときに、確かに山形県さっきの「さんさん」プランもそうだが非常に行動的に活動的に前に前にと進んでいます。私は2月、3月と村山特別支援学校の推進事業に関わりました。4日間、山形校と楯岡校に行きました。そこで目にしたことは建物もでき、先生方もいっぱいいます、そして子どもたちも一生懸命やっています。子どもたちが私たちを離したがるらない、帰るときなんかは。「先生、帰るの？今度いつ来るの？」と。学生も数名連れて行ったんですけど学生に対してものすごく親しみを感じた。そういう人間的なものをもものすごく求めています。先生方も言っていました、どんどんいっぱいいろんな人が来てほしいと。やっぱり親も、学校も、地域もそうですけども、やっぱり私はこんなことを言いますと語弊がありますけど子どもの可能性とか子どもの資質とかよく言いますよね、私も現場にいたときよく言いました。でもそれを形にするのは大人だと思います。実際、学校現場ではどうやって生徒に接していいとかそういう先生がいっぱいいるわけです。もっと自信を持って、愛情を持って、そして教師自身が、親自身が、夢を語れない社会になれば、カンボジアではないが本当に悲しい社会です。それをリードするのが教育委員会の皆さんであって、いろんな意見あっても、自信を持って、先生方に、そして親に子どもに、夢を語れるようにしていただきたい。要するにカンボジアの子どもは夢がないんです。他の世界を知らないから。そんなこと

で、今回私が経験したことを申し上げました。

ご協議、たいへんありがとうございました。

4 その他

事務局： ご協議、誠にありがとうございました。ここで事務局からお知らせを申し上げたいと思います。平成22年度は5教振を改訂することとしております。改訂にあたりましては教育懇話会の委員の方々をはじめ広く県民のご意見をいただきながら進めてまいりたいと考えております。来年度の体制につきましては今後検討していきますけれども引き続き就任をお願いする場合もございますのでその際には何卒よろしくようお願い申し上げます。ここで山口教育長から御礼のご挨拶を申し上げます。

教育長： 本日は先生方に長時間にわたりまして貴重なご意見等頂戴しまして御礼申し上げたいと思います。私もいろんな委員会に参加させてもらっています。これほど叱咤激励を含めて各委員からお言葉を頂戴したのは始めてかなと。先ほど座長から事務局からの説明は短くしろと。やはりそのために我々は来ているのだから話をさせなさいというのはまさにその通りで、我々が抱えている大きな課題の1つです。そうしても我々事務局からの説明文が長くなりすぎるというきらいがよくあります。いただいたご意見を我々の企画事業の中に活かしていくというのはそうすぐにはいかないかもしれません。大きな提言として我々は受け止めさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

先ほど事務局からありましたが、5教振の中間年ということでこれから見直しということとなりますが、これからも引き続き皆様方からいろいろなご意見頂戴いたしまして策定に向けて取り組んでまいりたいと思いますので引き続き皆様方のお力添えをいただけたらと思っております。

最後になりますが私事で恐縮ですが3月31日を持ちまして教育長の職を辞することになりました。4月1日からは大学に復職することになりますがこの3年と3ヶ月間皆様方に本当にお世話になったと思っております。私自身、最初の委員長の下でのコミュニケーション改革、そして今回の委員長の少人数学級。大きな事業のもとで少しだけ働かせていただいたということを誇りに思っておりますし、多くの優秀な職員に支えられてなんとかまっとうできたと思っております。今後とも山形県の教育行政に対しまして皆様方からお力添え・お言葉そしてご協力・ご支援・ご厚情を賜ればと思っております。本当によろしく申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

5 閉会